

第三の人生観

——道心を初めとして——

一

金子 大栄

人生観の依りて立つものは何か、を見定めることが、あらゆる思想の根本であり全ての哲学の基礎である。それだけそれは重要なものであり、万人に認容されるものであらねばならない。この意味に於て、古今東西の思想を概観すれば、凡そ二つの人生観とすることができる。その一は、道は自然にありということである。それは何といっても人間は自然の中から生れ出でたるものと思われるからであろう。哲学は自然観から始まった。されどそこに道ありとすることは、特に東洋的のものであるといわれている。それは東洋人には自然の恵みを感じる心が深かったということがあるかも知れない。それと共にまた自然の威力に畏敬して現われた畏敬感情もあつたのであろう。「天の命これを性とす。性にしたがう、これを道とす。」「道の自然なるを念ぜよ。」それはわれら東洋人の教えられた道徳であつた。これに対して道は人間の創意に依るといふ思想がある。自然というも人間生活の場所である。それは人間の知識によりていかようにも変化し得るものである。しかればわれらはその知識されるものより、知識するものへと帰らねばならない。自然より人間へである。そしてその人間といつても「いまここにあるもの」に他ならない。しかれば人生観の根拠となるものは「いまここにあるもの」の自覚の他ないであろう。ここに「汝、自身を知れ」といふ道がある。

「われ思う、故にわれあり」というもこれであるに違ひはない。実存哲学もそれに依るものといつてよいのであろう。それは自然に随順するものではなく、かえつて自然を制伏するものである。西洋思想の主流であり、現代人の知識となつてゐるものはこれである。ここに第二の人生観があるのである。

二

ここで先ず以て明らかにしておかねばならないことは、そのいづれも道心の依るところを求めているものであつて、道心そのものの上に立つものでないことである。したがつてそれらは、人生を思想する始めとなつても人生観そのものの初めとなるものではない。それは、その人生観に依りて道念が定まるのではなく、道念に依りて人生観が定まるものであらねばならぬということであらう。思想の始めは人生観の初めではない。「初心忘るべからず」とは即ち本心を忘れてはならぬということである。人生観として求められているものは、その本心である。「天地には今を初めとする道理あり」と説ける人があつた。それは自然に依りて道念が与えられているのではなく、かえつて道念によりてこそ自然の道理が見出されるということであらねばならない。しかれば人間の存在というも、その道念によりて見出されるものであつて、人間の存在を根拠として人生観は定めらるべきものではないであらう。それありて人生はあり、それなければ人生はない。そのそれが真実の人生観の本となるものである。

三

これに依りて思うに二種の人生観はいづれも直接に道の本心となるものではない。その限りに於て自然に順うというも、自我の実現というも真実の人生観とはならぬものではないであらうか。仏教に依れば世界は有限か無限かを論じ、大我小我を語ることは、いづれも戯論である。

したがって真実の人生観の根本となるものは求道心そのものであらねばならない。道は自然にありといっても、それをそれと見出せるものは道念である。自我の実現といっても、それを理想とするものは道念の外にはない。しかればその道念こそ人生の初めにあるものでなくてはならぬのであろう。そこに第三の人生観はある。それは第一、第二の人生観を包容して、かえって両者を成立せしめるものである。

しかればその道心とはいかなるものであるか。それは生死解脱の法を求めるところと教えられたものである。人間とは死を意識しているものである。その死あるが故に生は無意味であるというならば、人生そのものは成立しない。しかれば死あればこそ生は意味あるものであらねばならぬのであろう。道念とはその意味を求めるところである。そしてその道を求むることに於て人生はあるのである。

それが仏教の人生観であった。四諦八正道というも、人生の如実知見の外にはない。「自らに帰依し法に帰依せよ」というも、それは人生を涅槃に向うものであらしめよということである。それは自身の一生をそれで十分なるものであらしめよということである。自然の道といっても自らに帰依するものでなくてはならない。理想といっても、人生を完全燃焼であらしめる涅槃に向うものでなければならぬ。

したがって大乘仏教というも、その道心を以て初めとするものであろう。上求菩提、下化衆生というのは、この道は個人的な特殊のものではなく、惣べての人のものであることを明らかにするものである。しかれば自利々他円満といっても、それを実行するものは個人の道念であり、「仏となる道」というも「人となる道」に外ならぬものである。

しかればそこには一切の衆生をして涅槃に帰せしめる道があらねばならない。道念とは、その道が求められているものである。それが特に「浄土の大菩提心」と呼ばれることとなった。しかしその「浄土の大菩提心は、願作仏心をすすめしむ」るものであり、その願作仏心を「度衆生心と名づ」くことができる。それは如来二廻向によるからである。

これに依りて思うに、聖道・浄土というも、その菩提心には別はないのであろう。両者の別は道心そのものにあるのでなく、道心に依る行業に依るものである。道心の智行は出家持戒であり止観雙行であり、三学六度である。それが聖道であるとすれば、その修行のできないものは菩提心なきものといわねばならぬのである。まことに「自力聖道の菩提心、こころも言葉も及ばれず」である。されど人生の初めであるべき道心は、必ずしも出家発心を要とし持戒持律を本とするものではない。かえって在家庭生活をそのままにして導きとなるものであらねばならぬ。しかれば本願を信じ念仏往生こそ、真実に道心を満たすものではないであろうか。それこそ普通の道であるからである。

ここで思い合わされることは「学問には聖書がない」ということである。それは立場なき立場というようなものであろうか。しかれば宗教とは聖典をもつものといつてよいのであろう。されど聖道自力とは、その聖典を要としないものであった。原始仏教は、この法は他によりて悟るものではないことを明らかにしようとしている。大乘仏教もその精神を継承して自覚自証を本としている。したがって多くの大乘法典もその精神を明らかにするもの他にはない。その意味に於て聖道とは本来学問であるといつてよいのであろう。そこに聖道の修行者は常に経説を超えようとしている所以があった。

これに対して浄土教は全く聖教に依るものである。それは自覚といつても、それが真に自覚であつて「自見の覚悟」でないことを証明するものは經典の外ないからである。ここに「経とは常なり法なり」と領解され、「経教は鏡の如し」と受容された。自証も証自証の法なくば、その普遍性が見失われることではないであろうか。

親鸞はその真実の經典として『大無量寿経』を見出された。それは「本願を宗とし名号を躰とす」るからである。しかれば如来の本願というは道心の反省に於て、その根源に信心せられたものに他ならぬのであろう。その本願の表現は念仏であり、名号である。しかれば道念というも本願を信行するの他にはない。「信心即ち一心なり、一心即ち金剛心、金剛心は菩提心」である。したがつてこの道を行く外に人生はない。ただそれのみが万人の普通の道である

からである。これに対すれば聖道とは特殊の志ある人の特殊の行であるといわねばならぬ。それはそれとしての意味があつても、惣べての人に要求されている道ではないのである。したがって本願を信じ念仏もうさんと思い立つ時に人生は初まるのである。この初は始終を貫ぬく、それが摂取不捨ということである。

しかれば「初に言葉ありき」といわれる。その言葉は即ち南無阿弥陀仏である。その言葉は道理をあらわす。その道理は即ち如来の本願である。それに依りて第三の人生観は成立するのである。

四

されどその第三の人生観は第一の人生観を無視するものではない。すべては如来の本願という。その如来とは何を意味するものであろうか。「如より来りて如へ去く」という。その如の境地こそ『大無量寿経』に縷説せられた無為自然ではないであらうか。そしてその無為自然の境地こそ浄土であると説かれて念仏者を喚起せるものであつた。「信は願より生ずれば、念仏成仏自然なり、自然はすなはち報土なり、証大涅槃うたがはず」という。その「自然の浄土にいたる」ことが親鸞にあつても、深い喜びであつた。

われらは、初めに敬虔感情を与えたものは大自然であつたことを、忘れることはできない。悠久無限の自然に対すれば、大海の波浪の一滴に過ぎない人生である。されど翻つて思えばその一滴の波浪となっているものは悠久無限の大海である。しかれば第三の人生観は、その敬虔感情を初めとするものであつて、畢竟自然に帰依することに外ならぬのでないであらうか。

されど『大經』には、もう一つの自然が説かれている。それは善悪の業報の自然であることである。善悪の業に依りて苦楽を感じる、その感は即ち業の報である。したがってかかる世界に生まれたることも業であり、山河大地もそれに依りて感覺されているものである。その意味に於て自然は決して無為ではない。三千世界も成る時には成り、壞

れる時には壊れるのである。

こうなれば自然は二重であるといわねばならないものがあるようである。その一は無為自然である。それはむしろ超自然といった方がよいのかも知れない。彼岸の世界であり高次の領域である。また不思議界であり、ただ敬虔感情に於てのみ思慕せられるものである。その無為涅槃の境地こそ浄土と呼ばれる。したがって無為涅槃は即ち自然の浄土である。

されど、その無為自然は、直接に感知されるものではない。それはただ菩提心によりて受容せられるのである。これを親鸞は「念仏成仏これ真宗、万行諸善これ仮門、権実真仮をわかずして、自然の浄土をえぞしらぬ」といい、また「信は願より生ずれば、念仏成仏自然なり、自然はすなはち報土なり、証大涅槃うたがはず」といい、さらに「五濁悪世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはてて、自然の浄土にいたるなれ」と讃歎している。それらは、いかに自然の浄土を思慕せられたかを現わして余りあるものではないであろうか。「仏に従って逍遙自然に帰す、自然は即ち弥陀の国」とは善導によりて唱説せられたことでもあった。しかれば浄土を願うことは、自然を家郷とする心であるに違ひはない。そしてその自然にかえることこそ人生の道となるのである。

されど、それは已に明らかにせられたように、本願を信じ念仏することに依りてのみ身証されるものである。その行信なきものには「えぞしらぬ」自然の浄土である。しかれば定散二善に代表せられる諸善万行では、いかにしても眞実報土にいたることはできぬのである。その浄土はいかに夢想され、想観せられても、所詮は人間の理想である。そこは無為自然の涅槃界ではない。ここに第一の人生観も第三の人生観を本心として成立する意味があるようである。

五

したがって道を初心とするものは、第二の人生観を拒むものではない。「いま、ここにある」もの、それより外に

思想の立場とすべきものはない。されど思想の立場となる始めは即ち道の初めとなるものではない。しかるに今日人生の初めとして定められているものは悉くみな思想の始めではないであろうか。それは人間の人間として与えられているものはその本能であるということである。そしてその本能とは所詮、食欲か性欲かということである。道徳というも自他あい助けて、その本能の満足を求むることの外にはない。こうして第二の人生観は成立しているのである。

されど、こうして見出されたものは、生物としての始めであり、また動物としての本性であって、人間生活の本心となるものではない。したがって人生の初めとなるものではないであろう。道が求められていないからである。しかれば第二の人生観も、それが人生観であるためには、道を求むることを初めとするものであらねばならない。

しかれば「今ここにある」ものは、道を求むることに於て人生の初めにあるのである。そこに自己を尊重するといふことの意味もあるのである。それは已にいうように、死に問いかけられての生の答えである。そこに生を苦として涅槃を求められた仏陀の正道があった。しかれば「汝、自身を知れ」ということも、そこに自身の道を見出そうとせるものに外ならない。「われ思う、故にわれあり」ということは、必ずしも「我れ欲す、故にわれあり」ということではないであろう。「われ悩む、故にわれあり」と言った人もあるのである。実存主義の思想にも、神に繋がるものと繋がないものがあるということである。畢竟これ道心を離れて人生観は成立しないということではないであろうか。しかるにこうして人間の道を求める時、そこに人生の理想というものが現われる。而してその理想とは、結局、無為自然なるものということになるのではなからうか。ここには第二の人生観も第一の人生観と帰一するものがあるように思われる。そしてそれを帰一せしめるものは第三の人生観である。

六

ここで最も重要である当面の問題は「道」とはいかなるものかということである。それは已に生死を解脱すること

であると教えられた。その解脱とは超越しつつ随順することである、随順しつつ超越することである。したがってそれは人間生活を捨離することでもなければ、業苦のままに流転することではない。唯だ人生を場として行われるものである。

しかるに仏教は、道は業苦を免れしめるものであるということから出発した。そこに出家発心を以て聖道とせられることとなったのである。ここでは、その出家聖道の意味を説くことはできない。この身には、その志願もなく、この経験もないからである。されどその行人を尊敬し、その功德を称讚することができる。そこに超越しつつ随順する意味があるからであろうか。その人は万人の師標ともなり一世を照らす聖者となる。そこには人間は個人の集合ではないことが彰わされている。その人は吾等の代表として、その道徳を成就しているのである。吾等はその人の功德を称讚し、随喜して、その道徳を受用しているのである。

それは聖道と言い習わせるものであった。しかし、その道は必ずしも捨家棄欲を要とするものではない。人はその天分を尽くすことに於て、その道の聖者となることができる。それは芸道に於ても呼称せられている。画聖あり、歌聖あり等々である。時には武士道といわれれるものもあつた。しかしそれらは、すべてその道に於て世に貢献するものでなくてはならぬのであろう。したがって世に貢献するものは、すべて道人といつてよいのである。教育家も医師もそれである。誠実なる政治も賢者によりて行われねばならない。それらの道人は捨家棄欲という形を取らなくとも、精神的には愛欲名利に執えられないものがある。したがって道の行に於ても、それぞれの戒あり、定ありて、独得の智慧を身につけているものである。そして、それらの道人の多くは禅を学び師家の風格あることも意味あることであらねばならない。それらは世にありても世を超えているものである。

したがって、その道を行い得ず、またその道に志なきものは、凡俗であり、庶民といわれ群生と呼称されている。そして、それは何といつても多数であり、無数であることは否定することはできない。されどそれらの人々も死に間

いかけられて、生の意味を求めている。その意味に於て道心なきものということはできない。ただその道心を満足するために特殊の修行をしないことに於て無道心といわれている。しかし特殊の修行を要するということは、それだけ人生を離れることにならぬであろうか。われらの要求しているものは、人生を道とすることである。人生そのものが道場であることである。それは凡人と聖賢とを分たない道である。それこそは、群萌の宗教といわれ、凡俗の仏道といわれるものであらねばならない。それが已に繰返し繰説せる念仏の一道である。

七

人間に取りて道心とは如来の本願を信ずることである。已に「信心すなはち一心なり、一心すなはち金剛心、金剛心は菩提心、この心すなはち他力なり」という。その道心は凡聖を分つものではない。そしてその本願とは即ち如来の名号である。「南無阿弥陀仏という願をたてまして……南無阿弥陀仏となります」。したがって称名念仏すること、それが人生を道場とするものである。

その念仏の道場となる人生とは、あるがままの人間生活である。食欲と性欲とに動かされ、いわば本能のままに生活するものである。そのあるがままの一生を念仏とする。それは薪が点火されて炎となるが如く、愛憎の煩惱が念仏によりて生死を超える道場となるのである。凡夫に取りては、道徳とは愛憎の煩惱を制伏して行われるものではない。恰も「氷と水の如くにて、氷多きに水多し、障り多きに徳多き」ものである。

その真相は唯だ念仏者によりて身証されるものである。したがって、それはそうであるという外ないものである。それは他力自然である。しかれば、これに対して聖道は自力精進であるに違いはない。そこから他力自然は群生の道徳ともいわれるのである。

されど已に他力自然の道徳という。その道徳の性格は自力聖道と異なるものがあらねばならない。その最も明らか

なることは、自力聖道に於ては、その修行が増進したとか成就したとかいうことはあるが、念仏の道徳にはそのようなものが認められないことである。「勉めるものは凡、好むものは賢、楽しむものは聖」といわれている。そこに所謂「できている人」というものがある。それが人物というものである。されど本願を信じ念仏する道には、進歩とか成就とかいうものはない。その反省に於ては、かえって退歩を感じざるを得ない念仏者の道徳感情である。本願を信ずることに依りてできている人物というものはない。その道は常に今を初めとするものであり、そして今を終帰とするものである。こうして念仏は人生を道場とし、愛憎の煩惱を薪とし、それを完全燃焼の涅槃に帰せしめるのである。

八

しかるに経説に依れば、その煩惱業苦の人界を道場とするものは法蔵菩薩である。しかれば念仏者とは即ち是れ法蔵菩薩であるのであろうか。

多くの大乗経論には、菩薩の願行が説かれている。それは仏となる道であり、また仏である道である。しかれば経説の法蔵菩薩の願行とは、その仏であり、仏となる道を代表するものというてよいのであろう。しかれば法蔵の願心に於て聖道の精神を思い合わすべきが当然でないであらうか。化益される群生なくば聖道の修行も意味を為さない。

聖道の行徳は衆生に廻施せられて、その意味を現成する。その意味に於て歴史上に多くの聖者をもつことは、即ち法蔵菩薩の實在を証明するものであらねばならぬ。

されど本願を信ずるものに取りては、南無阿弥陀仏、即ち法蔵菩薩である。法蔵菩薩とは原始念仏者である。「南無不可思議光仏、饒王仏のみもとにて、十方浄土のなかよりぞ、本願選択撰取する」という。その「南無不可思議光仏」即ち法蔵菩薩である。しかれば南無阿弥陀仏の廻向というも、廻向するもの廻向されるものというようなものがあるのではない。南無阿弥陀仏は即ち阿弥陀仏の自己表現である。その阿弥陀仏の現行こそ法蔵菩薩の行願に他なら

ぬものである。

したがって称名念仏は「諸の善法を摂し、諸の徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり」ということは、「不可思議兆載永劫に於て、……忍力成就して衆苦を計らず。……和顔愛語にして意を先にして承問す。……諸の衆生をして功德を成就せしむ」という経文と思ひ合わさるべきものであらねばならぬ。ここには、久遠の真実は最も手近に実感されるものであり、手近に身証されるものは最も悠遠なる真実であるということがあるのである。

しかれば念仏者の人生には往相還相ありて、それは如来の廻向であると説かれていたことも、それ即ち法蔵菩薩の願行であるからではないであろうか。われらの一生は罪惡深重であり煩惱熾盛である。それがこの身の念仏と菩薩の願行とを分別しようとする。廻向という言葉もその分別の上に領解しようとしているのである。されど廻向の真義はその分別を捨てしめるものではないか。したがって往相還相は念仏者に受行せられるものであって、それは即ち法蔵菩薩の願行の二相であらねばならない。

これは言わば「法蔵菩薩いずれにありや」と問うているものである。その修行の場は山林の道場に限るものとは思われない。その身分も、出家の聖者であるとは限らないであろう。時には子を育てる母の上にも、夫に従う妻の上にも、それを感じる事ができる。されどそれは修行であるという意識をもつものでない。その意味に於て、その行は無相であり、また無功用である。そしてそれなればこそ純粹無漏ともいえるのである。その無漏無相無功用なるもの、それが即ち菩薩の願行である。

九

その法蔵菩薩の願行に報われて浄土がある。これによりてその浄土を眞実報土という。報とはむくいであり、即ち感じられるということである。如来の本願を信ずるといふ、ただそれに依りてのみ感知することができる境地、それ

が自然の浄土である。その他の思想や方法では「えぞしらぬ」といわれる境地である。したがって、その境地こそ無為自然であり、平等一如であり、大涅槃界である。

しかるにこの平等一如こそ人間の理想である。人間の知識と行動とは、すべてこの理想に於て用ら^{はた}れているのである。されど吾等の理想と云っているものは、相対的であつて絶対的なるものではない。しかしその実現不可能の絶対的理想なくば、相対的理想も意味をもたないということである。そして、その絶対理想としては「神、永遠なるもの、至高善」が数えられている。しかれば、その絶対理想こそ無為自然の境地ではないであらうか。ここには第一、第二の人生觀も帰一するものがあるようである。

その絶対理想としての平等一如、それこそ至高の智慧であり、純粹感情である。それは人間愛に止るものではない。生あるもの惣べてを一躰と感ぜしめるものである。「何故に汝を動物といい、我を人間といわねばならぬか」という心根である。そしてその純粹感情の境地こそ、即ち無為自然の世界であり、眞実報土であり、自然の浄土といわれるものであった。

したがって浄土には、一切の差別はない。しかし、その平等というは、差別と相對せられるようなものでないことは言を待たぬであらう。その平等とは差別に光を与うるものである。その光こそ無量・無辺・無碍といわれるものである。浄土は即ち、その無量光明土である。そして、そこは念仏者によりて願生せられ、欣慕せられているのである。これに依りて浄土の教説は、すべて領解せられる。そこは生るゝもの多ければ多い程、広さを感じしめる世界である。一切の智慧善惡等この差別なき境地である。先に生るゝものと後に生るゝものと、その証に淺深ない所である。それこそ大涅槃界というものである。

その純粹感情の世界は、したがってまた純粹感覺の境地である。眼に見、耳に聞くもの、みな純粹である。それが淨土である。六根清淨なればその人は淨土を感じているものであり、淨土を感じている人ならば、六根清淨の徳を与えられる。それだけ六根の清淨こそわれらに取りて願わしきものである。六根とは眼・耳・鼻・舌・意である。その眼に見えるものすべては、光に輝く、青色青光・赤色赤光、それが淨土である。その耳に聞くもの清揚哀亮にして微妙和雅である。それが淨土である。その音声は特に吹く風と流るゝ水にあることは留意すべきことであろう。文化は空氣と水とを濁して来た。それこそ穢土というの外ないものではないであろうか。

その梵声悟深遠の世界は、「無量の香あまねく薫る」。そこにあるものは「仏法味を愛樂し、禪三昧を食とする」。その淨土の「宝性功德の草は、柔輦にして左右に旋り、触るる者は勝樂を生ず」るのである。畢竟これ純粹感覺の境地である。このように純粹感覺の世界を受用するもの、それが純粹感情である。しかればその感情を感覺に志向せしめるもの、感覺を感情に歸入せしめるもの、それこそ意根というものであろう。こうして淨土とは六根清淨の世界であると説かれたのである。「目、その色を觀、耳、その音を聞き、鼻、その香を知り、舌、その味を嘗め、身、その光に触れ、心は法を以て縁とする……」こうして六根清徹して、「もろもろの悩患なき」ところ、それが淨土である。しかれば淨土を願う念仏者には煩惱業苦の人生に於ても、この純粹感覺は与えられてあることであろう。そしてその純粹感覺が念仏者の人格となるものであらねばならない。その顔色の光、その言葉の心音、それが人格の香りであり、その人柄の味であり、肌触りの柔らかさを感ぜしめる。それこそ念仏者の徳となるべきものではないであろうか。念仏者も者としてこの世にあるかぎり、六根のすべては穢惡汚染を免れないのが現実であるといわれるかも知れない。されど念仏者は、念仏するものであることに於て、淨土の感覺をもつものでなくてはならぬのである。